

## 運動を楽しみ、つくりだす主体を育成する体育科の授業づくり

体育科研究部

### 1 協議題設定の理由

近年、スポーツを取り巻く環境やその捉え方は大きく変容している。具体的には、ジェンダーの平等や身体能力の多様性への対応が強く求められるようになり、スポーツが単なる競技ではなく、社会文化的な創造物としての側面を持つことが広く認識されるようになってきている。スポーツの歴史的変遷を振り返ると、それは決して不変のものではなく、これまでも幾度となく変化を繰り返してきた。そしてこれからも、その時代や社会に生きる人々の価値観や影響を色濃く受けながら、絶えず変わり続ける性質を持つものであると考える。

このような背景の中、文部科学省が策定した第3期スポーツ基本計画においては、スポーツとの多様な関わり方を示す新たな視点として「つくる、はぐくむ」という概念が明確に打ち出された。これにより、学校の体育授業においても、児童が与えられた運動をただ受動的に享受するだけでなく、自らの手で運動を創造し構築していく能力、すなわち「つくりだす主体」を育成していく必要性が高まっていると言える。

これまで体育の授業づくりにおいて、教師が児童の実態に応じてルールや形式を簡易化・複雑化するなどの教材化を図る実践は多くある。しかし、このアプローチは、児童の「～になりたい」「～したい」という内発的な動機や創造性というものは十分には含まれず、児童が運動の担い手としての主体性を獲得するに至らないという課題がある。こうした課題を克服するため、本研究では主題を「運動を楽しみ、つくりだす主体を育成する体育科の授業づくり」と設定し、小学校体育科における「つくる」ことの深い意義と、児童が学習目標の達成に向けて主体的に運動を創造・構築していくための具体的な学習の在り方を提案することとした。

そもそも、世の中に広く一般化されているスポーツの多くは、成年の若者の身体的特徴や体力を基準としてルール化されている。したがって、完成された大人のスポーツをそのままそっくり小学校の体育授業に当てはめようとする、教師が思い描いている理想的な学習の姿と、実際に児童が表現する動きとの間に、大きな解離が生じることは容易に想像できる。このような視点に立つと、教師が単独で教材を考え、工夫を凝らすだけでは不十分である。児童自身が、自らの身体や集団の特徴に合わせてルールを柔軟に考え、自分たちなりの楽しみ方を主体的に模索していく力を養うことが

不可欠である。このプロセスを経験することは、児童が学校生活を終えた後も、人生の様々な局面において生涯を通じてスポーツに親しみ続けようとする素地を育成する上で、極めて大きな意義を持つと考える。

ここで明確に整理しておかなければならないのは、「つくりだす」といっても、そのプロセスのすべてを児童に丸投げし、委ねるというわけではない点である。児童が学習を進める上で、教師が「児童は何を基に『つくる』のか」という視点をしっかりと整理し、提示することが極めて重要である。真に運動をつくりだす主体を育むための具体的な学習のプロセスは、以下のようなサイクルで構成した。

#### (1) 学習内容と視点の共有

まず対象となる運動を通して、教師が学ばせたい内容を児童と共有することが大切である。単に運動を行うだけでなく、「何を基に運動をつくるのか」という明確な基準を教師が整理して提示することで、児童が迷うことなく主体的に取り組むための基盤を形成する。

#### (2) 目標と照合しながらのルール・形式の創造

次に、児童自らが提示された学習内容や目標と照らし合わせながら、自分たちの身体的特徴や集団の特性に適したルールやゲームの形式を実際につくり上げる。成人向け向けの、世の中でいわゆる一般化されたルールをそのまま適用するのではなく、自分たちで楽しみ方を模索し、構築していく活動を重視する。

#### (3) 実際のプレーを通じた試行錯誤

つくり上げたルールや形式を用いて、実際に運動やゲームを行い、試行錯誤を重ねる。この実践的な過程を通して、自分たちの設定したルールが実際に機能するかどうか、誰もが楽しめるものになっているかを検証する。

#### (4) 振り返りとサイクルの反復

試行錯誤を行った後には、自分たちのつくり上げた運動やルールが、当初設定した目標や視点と離れていないかを振り返る活動を位置づける。

このように共有から始まり、目標との照合、プレーの試行錯誤、そして内省的な振り返りへと至る一連のサイクルを繰り返すことによって、運動をつくりだす主体を育むことができると考える。

(文責 河野 吉信)